丈夫豈傲兒女子徒爲涕泣乎、聞先人幼備嘗艱難、寄跡於親戚、夙慨家道不振、遂奮然懷星金、負笈於京師。業已成、一旦歸鄉、時父母老無可養者、乃決意開業、遂以醫鳴矣、嗚呼、先人以落魄之身、遊于千里之遠、挽回家道、於既衰、恢復家聲、於將墜、誠可謂吾家之中興矣、余不肖、蒙先人薰陶、日非一日、餘音歷々猶在耳、當蚤夜奮勵、螢雪孜々、誓以必死、酬鴻恩之萬一、耳嗟乎、庸詎知無他日業成志遂、錦衣歸鄉、駘蕩陽春、再詣此墓、使先人之靈、欣然瞑目泉下之時耶、俄而前山變容、谿谷震動、寒飈颯然、撒霰而至、乃倉皇下山、咫尺曚々、晨乎昏乎、不能辨矣、

自期如此、可知思先人非徒然也、

甲午梅雨時節　　笠間益安批多罪

第五高等學校の人々と火のみちのくちへ行軍の道ゆき

助教授　園　哲　雄

一　段

いふも久しき弘安の、昔にあり玄元寇は、そのをりとのみ思ひきや、かゝる明治の文明に、日本魂あることを、知らでやなめきから人は、僅に三人(ミタリ)歸りてし、ろの胤ながら懲りずまに、悪しきたくみを拷衾(タクブスマ)、新羅(シラキ)の國になさんとは、

二　段

時宗ぬしと秀吉の、うしとのみいと武き名を、もはら揚げしは口惜しや、われ今彼をことむけ

て、二人の上に出でばやと、彌猛心の一節に、齒がこをなゑゝろひありて、牙山の砦をうち破り、海にも敵をうち沈め、生捕る事も多かりき、

三　段

あやにかしこき現つ神、わが大君はさゞらがた、錦の御旗秋風に、ふきなびかして大御稜威、廣嶋にさへ出て給ふ、時こそよけれ平壤の、敵はろの日にこなごろし、うれしなゞゝは尋常の、事をしいへばこれをしも、いはゞ中々をなならん、

四　段

わが同胞はもろこしの、矢丸の雨を犯す世に、たゞしき窓をおし開き、心ゆくまでこの文を、學ひ習ふはわが君の、こよなき大御惠にて、報ゆるすべもあらざれば、せめて平戸へうち出てゝ、この世を蓋ふいきざしを、高麗の海原見はらさん、

五　段

劍は腰に銃は肩、立田の山にあからひく、旭の旗をあげ初めて、光くまなきくま本の、高橋川を下りつゝ、百貫石ゆ行く船を、送る人影はのかにて、心は海を渡れども、ふみしなければゑらずやと、跡はゑら波ばかりなり、

六　段

夢かうつゝか玉鉾の、みちのくになる松嶋の、緣の松は目の前に、高く立てるも臥したるも、下にたれつゝ白ゆふの、浪をかけても見ゆめるは、九十九嶋てふ嶋原の、港なりけり戰のゝ有馬の城を移しにし、跡にふく風身にぞしむ、

七段

温泉岳を仰き見て、西へ出づれば三日月の、見おくり顔の眉山も、雲間さ立てり神代は、あり馬の軍ありし時、築きし城の跡ぞとて、有明洋と天卿の、洋との會津いと狹く、つゞける陸はゆく人の、過ぎがてに見るけしきあり

八段

とく進めよと諫早に、名も高城の祉には、地の祖の龍造寺、家晴ぬしを祭るりと、本明川にちなみある、橋の眼鏡は都なる、萬世橋にさもよたり、永昌具津久山古賀、早く過ぎゆく矢上には、ゆきろふ人もにぎはゝし、

九段

空澄む秋の日見咲、谷に湛ふる源は、下へ巧に遣水を、理樋遠く長崎の、浦の戸たゝく千々の船、立つ檣は森なせり、伊木力大村鯛の浦、躍り行くへは彼杵にて、具足玉てふ勅、いつか彼杵となまりけん、

十段

球麻の川瀬のろれあらで、逆かまく濤の早瀬戸は、げに早岐かあろの西は、闇にとびかふ蚊の睫、細き名もてる針尾嶋、日宇村ふれば佐世保にて、雲の烟に虹の壁、つゞける艦は龍のごと、やがて躍りて支那へ入り、風の木の葉をちらしなん、

十一段

むげなきたなきから心、よく見て痛く討てよとの、ためにやあらん眼鏡岩、見過ぎて越ゆる襟

峠、幣もとりあへざりしから、紅葉の錦手向けつゝ、豐の國なる耶馬の溪、こゝにもありと思ふまで、高岩水に墮ちんとし、常盤樹空をおほひたり、

十二段

明石ならねどほのぐゝと、九十九島にかゞやくゆく、舟をしと見る江迎は、五島まで見ゆ田平より、たひらと祈る名にしれふ、雷の瀨戸うちわたり、平戸の城は君がため、萬代祝ふ龜岡の、社たふとし玉の緒の、長き千里の濱もあり、

十三段

千とせを君に捧けなん、鶴が峯には御舘あり、西の國なる西のはて、あはれ都は遠くとも、いとあきらけき文のわざ、鬼とりひしぐ武き道、かね備りて大君の、御楯とならん御心ぞ、久方の天荒金の、地をも動し給ふべき、

十四段

玄海灘の口に立つ、屏風の岸にうつ浪の、花ささぬるは廣瀨にて、港の嶋は黑子にて、南龍崎は臺場跡、子持石には手な觸れそ、石にてかけし幸橋の、奥には昔阿蘭陀の、船をつなぎし松もあり、築きし壁も井戸もあり、

十五段

ふたゝび瀨戸をたひらにぞ、渡りて北は玄海の、洋に沿ひゆく前にては、大嶋迎へ後には、安滿の岳のいと高く、聳えて人を送るめり、御厨村は撿校の、下り給ひし名殘にや、志佐今福は元寇の、烈しろりつる跡ぞとよ、

十六段

憎き寇ちは有りねよゑ、對馬と壹岐との人々を、屠りつくしてこゝもまた、親を殺され子をうたれ、財も家もやゝうせぬ、さもあらばあれ外國の、耻はうけじと矢丸をば、物ともせずに進み出て、うちこむ太刀の鋒は、火花を四方にちらしけん、

十七段

今ころ死なめ海ゆかば、水漬くかばねと誓ひけん、誠は物を動して、すはや吹きまく大風に、怒れる濤の鷹嶋は、空に飛ひ立つ潮の沫、底ひに沈む敵の艦、藻屑となりしろの中よ、みたりはわざと歸らしめ、武きわが名を傳へにし、

十八段

物に狂へる支那人は、はかなき軍をまた起し、今はや四たびは大敗、這々半はにげ去りぬ、突けよ進めよ我が軍、蹂めよ躙れよかの都、こたりはれろか一人をも、許すものかはこたびこそ、四百餘州をことゞく、貢ぎ奉らすべけれ、

十九段

伊万里よ闇く有田燒、これ福嶋の基にて、又濱燒ぞよきといふ、唐津は昔さて彦の、遠き船出のところにて、領巾をふりつゝその船を、招きかへさんとせし人の、叶はで遂に加部嶋へ、飛びて石にぞ化りしかば、祭りて田嶋といふとかや、

二十段

玉嶋川は足姫、尊の新羅うたましと、うけひてつりし年魚をとて、めづしところはの給ひし、

めをまよかへて郡をば、松浦と呼へれ文祿の、名古屋もさのみ遠からず、いづれも今の世の中に、よしある處ありければ、とふらふ袖も露繁し、

二十一段

沖つ白浪うちよする、虹の松原れのづから、ろよめく風の琴の音を、まとゐさく日はから錦、たゝまく惜しきものにころ、小城の櫻が岡の花、をりあらぬこそ恨あれ、ある聖をも伴ひて、見せおましろば見所の、あきものろはといひおまし、

二十二段

天山に立つ碑は、麗せき阿蘇の大丈夫が、たゝらの濱に敵をうち、來りてこゝにみよしのゝ、ミかどのみため潔き、名をとゞめたる處あり、もしさかしまの世にあはゞ、かくてぞ操立てつべき、かくてぞ國を興すべき、かくてぞみかどは護るべき、

西征雜詠（其二）　教授　笠間　梧園

宿松嶋枕上作

繞枕波濤吠晚風。喧囂恰與在船同。此身不是竄流客。一夜眠安孤嶋中。

旅寓獨酌醉中放歌

日暮海風吹髮生。豪氣勃々欲鞭鯨。天涯官跡茫如夢。悔携筆硯入帝京。丈夫成名豈無地。報國未必在簪纓。雪後孤竹色愈綠。雲裡月光不傷明。却愧圭角未得磨。哦詩輙作不平鳴。此夜蕭々寒雨下。爐邊呼得酒一瓶。哀絲豪竹彼一時。吟哦沈々獨自傾。醉裡乾坤堪容軀。世途艱險未足驚。即今應學幽谷鳥。深藏羽翼未放聲。自期他日遷喬處。和氣靄然春滿城。